

〔笈埃隨筆〕強勇

夫凡獸を見聞及びぬるに、熊ほど強力なる物ばなしと覺ゆ、薩摩國にて、獵人は山の岨をねらひ歩きけるに、濱邊に大熊一雙、子熊を連て蟹をとらせ居たり、傍へなる大石を引起し、手して是を差上て、其下に子熊を入れて、蟹をとらせける、子は只餘念なく喰居ける、親熊は大石を持上ながら、四方を見廻す處に、忍び寄て思ふ儘に月の輪をねらひ濟して打放す、何かは以てたまるべき、彼石を打落し、倒れて一箭に留りければ、村人歸りて人を集め、親熊をば取得たり、扱子熊を取らんと十人計りして、彼石を引起さんとするに、更に動きもやらず、追て人を増て三十二三人して漸に引起し見れば、子熊は打栗の如くびしびて、砥の如し、是を以て計り見るに、左程の犬石を輕々と引立て、大切に養育せる子を下へ入て置事を、容易く思ふ程にあらざれば、危き事はなすべからず、然ば先四五十人力は有べきかといへり、○下略

捕熊

〔北越雪譜 初編 上〕熊捕

越後の西北は、大洋に對して高山なし、東南は、連山巍々として、越中、上信、奥羽の五國に跨り、重岳高嶺肩を並べて、數十里をなすゆゑ、大小の獸甚多し、此獸雪を避て他國へ去るもあり、さらざるもあり、動ずして雪中に穴居するは熊のみ也、熊膽は越後を上品とす、雪中の熊膽はことさらに價貴し、其重價を得んと欲して、春暖を得て、雪の降止たるころ、出羽あたりの獵師ども、五七人心を合せ、三四疋の猛犬を牽き、米と鹽と鍋を貯へ、水と薪は山中在るに隨て用をなし、山より山を越、晝は獵して獸を食とし、夜は樹根岩窟を寢所となし、生木を焼て寒を凌ぎ、且明しとなし、著たまゝにて寢臥をなす頭より足にいたるまで、身に著る物悉く獸の皮をもつてこれを作る、遠く視れば猿にして、顔は人也、金革を衽にすとはが、る人をやいふべき、此者らが志所は、我國○越後の熊にあり、さて我山中に入り、場所よきを見立、木の枝藤蔓を以て、假に小屋を作り、これを居所